

# 銃後文学としての小説「突貫」

―戦時下を生きる生活の諸相と「私」の形象をめぐって―

瓜生 清

はじめに

島崎藤村の短篇「突貫」(『太陽』大2・1、のち『微風』  
〔緑蔭叢書第四篇 大2・4 新潮社〕に収録)は、小説  
家への転身を賭した苦闘の内幕を伝える作品で、併せて  
藤村の日露戦争観を読み解くに足る重要なテキストであ  
る。しかし、長らく藤村研究を主導してきた瀬沼茂樹<sup>(注)</sup>  
の指摘が、「日露戦争の不安の中に、『破戒』を書いて、  
新しい作家生活に突貫して行く気分を、それにふさわし  
いスタイルで描いた。」という型通りの紹介の域を出な  
いように、今日までその論究は至って低調である。冒頭  
と結末の点線符号、多用される現在形の表現、段落を構  
成する空白部の意味等、スタイルの考察に主眼を置いた  
岩見照代<sup>(注)</sup>が研究の先鞭をつけているにすぎない。もち

ろん、岩見の論には、沈黙符号に置き換えられた不在の  
言語の意味について、踏みこんだ考察を展開して示唆す  
るものがある。

しかし、注視を集めてしかるべき題材、独自性を発揮  
した小説形式でありながら、現在まで、研究の関心外に  
置かれたままの感が強い。わたくしは、岩見が問題提起  
したスタイル面の考察も重要な事柄であると認めるもの  
であるが、「突貫」が銃後の世界で苦闘する「私」の形  
象を軸にして、日露戦争下の不安・緊張の種々相を浮き  
彫りにした創作であることを明らかにすることが急務で  
あると思われる。以下、大向こうをめがけた正  
攻法の戦争文学ではないが、戦争の激化に比例して動揺  
を深める銃後に焦点を当てた別様の戦争文学として考察  
してゆきたい。

## 本論・その一

### 「突貫」と藤村の日露戦争観

出世作『破戒』（明39・3）と日露戦争との関連に言及した次のような自注（『第三巻の後に』（『藤村全集』第三巻、大11・2 藤村全集刊行会）がある。藤村にとつて日露戦争体験と文学者の自己革新が不可分のものであることを再確認した周知の文章として知られる。そこに藤村の戦争への対峙の仕方を暗示した次のような一節がある。

戦争が長びけば長びくほど、私の周囲にあつた町の空気はシーンとしたものと成つて行つた。私は開戦当時の熱狂と混雑とを見たり聞いたりするにも勝つて、一層胸を打たれることが多かつた。大きな戦争の影響は私達の日常生活にまで深刻に浸つて来て、それを自分の身にひしくと感ずるやうに成つたからである。私はあの戦争の続いた年の冬に、馬場裏の草屋根の下で『破戒』の稿を続けた当時のことを忘れかねる。

自撰全集に添えられた回想の内容は、自費出版という破天荒な企図に邁進する小説「突貫」の作中時間にそのまま重なる。興味深いのは、戦争が投げかける重圧を、厳しい戦況を注視する国民の重苦しい沈黙から確認する姿勢なのである。それは、膠着した戦況と表裏一体の関係にある銃後の「日常生活にまで深刻に浸つて来」る窮乏、すなわち戦時経済体制の強制から回顧する視点に明確に打ち出されている。

戦争がいかに銃後の国民生活に多大な苦痛を強いたかを振り返つた自撰全集の回想文に接続して、小説「突貫」の第十三節の旅順攻略祝勝会に集まつた群衆のどよめく声に耳をすます「私」の姿が引用されているのは極めて注目すべき事柄である。つまり、「突貫」を例示しながら「私が最初の長篇の試みともいふべき作の前半はこんな空気の中で生れた。」と日露戦争体験を整理した回想は、小説「突貫」が、起死回生をはかる『破戒』創作時の苦心と、戦時体制下の銃後を一体不可分に追究した作品として認識していたことを証拠づける文章なのである。

戦勝を祝う祝賀会は、明治三十七年九月の遼陽占領の時を始め、重大な会戦のつど津々浦々で熱狂的に行われた。ところが、先述したように「突貫」が唯一取り上げた戦勝祝賀会は旅順攻略の場合なのである。旅順攻略戦に関係する軍人といえ、乃木希典においてほかにない。「突貫」において、戦端が開かれて以降、一進一退の戦況の行方を不安と忍耐で見守っていた国民の待ち望んだ吉報が、旅順開城の祝勝場面で熱狂的な歓喜となつて弾ける書き方をされているのは極めて興味深い。

明治四十五年七月三十日の天皇の崩御は、田山花袋『東京の三十年』所収の「明治天皇の崩御」が詳細に伝えているように、国民全体に深い悲嘆と喪失感を喚起させる衝撃となつた。「御大葬を拜せらるゝために御上京の旨、御葉書なつかしく拝見仕候。斯の紀念の週に、兄とわれと同じ都会の中にあるといふことは、仮令拝姿の機会なくとも感深きもの有之候。」と記した大正元年九月十二日付け神津猛宛葉書は、藤村が一つの時代の終焉にどのような反応したかを窺わせる資料である。『破戒』以降、物心両面にわたつて助力を惜しまなかつたパトロン神津

に宛てた文面には、著作家の独立と自尊を懸けた戦いの時代を追想する思いが込められている。つまり、大葬を「感深きもの」という万感の感慨で送葬した藤村は、明治という時代とともに生きた著作家の戦いの歴史を内省するようにしむけられたと考えられる。葉書を発信した翌日、大正元年九月一三日の大葬の日に乃木大将夫妻が殉死したことは、殉死の是非はともかくとして、時代の終焉意識を一層強く自覚させる衝撃となつたであろう。さらに、大正二年元日の神津猛宛葉書に「諒闇中につき御左右御伺ひ申上候。」と書かれた書信の追伸に「突貫」の完成を告げ、記念に掲載誌「太陽」を贈呈している事実をも勘案すると、藤村は「突貫」において、幾多の難題を排して『破戒』の完成に焦慮した苦闘を書くことによつて、日露戦争体験を総括しようとしていたことを示唆するのである。

## 本論・その二

### (一) 戦争が及ぼす戦後の生活苦

「私」が勤務する「塾」は、郡・町から補助を受けていること、同僚教員についての「植物の教師の学者らしい静かな容子」(三)等の記述から推測すると、学制における旧制中学校に相当する私立の教育機関ということになる。

第三節は「私が今、どれほど僅かな生活費で自分の家を支へて居るかといふことを打ち明けたら、定めし甥なぞは驚くだらう。」と書き出される。田舎教師の勝手元不如意を訴えているのであるが、「俸給」削減に関連して「戦争以来、郡から塾への補助は絶えた。町からの支出される金も余程削られた。私達は俸給の高に応じてそれ／＼受ける分を少くした。」と書かれていることは、戦時体制下を念頭に置いて考えると、戦争遂行のために国民生活が蒙った圧迫が極めて深刻な事態であった状況を浮かび上がらせる。「乏しさ」を不可避免ものにした時代背景は、明治三十七年三月、戦費調達のため第二十

議会提出の臨時軍事費及び臨時事件費予算の財源の充当に、「地租・営業税・所得税・酒税・砂糖消費税などをひきあげ、小切手印紙税・通行税・織物消費税・米穀輸入税などを新設<sup>(注4)</sup>」する大増税が断行されたことにある。その結果、税収の見込めない県市町村は緊縮財政で凌がねばならず、そのしわ寄せは教育予算の縮減・全面凍結となつて私塾に大きな経営的打撃を与えることになつていたのである。その煽りは「私」の「俸給」の大幅減に連動したのである。

第十四節に、「私」の著述の進捗状況について、戦争勃発以来「一年近くか、つて」いるにもかかわらず、漸く半分しかはかどっていないことが記されている。仕事がつすべて完了するまでには「これから先一年」を要するという事態は、「奈何してその間妻子を養つて行かう。」と焦燥感を募らせ、生計問題の逼迫が抜き差しならない状況になつている。ここには、「俸給」削減と戦費調達<sup>(注5)</sup>が連動していたことと同様の戦時財政の問題が関係している。日露間に戦端が開かれたのは、明治三十七年二月八日であるので、進捗状況の途中経過に触れた一年後の

明治三十八年一月一日、「非常特別税法改正」が議會を通過している。國民が二度目の大増税の負担に喘がなければならなかつた過酷な事実に目を向けなければならぬ<sup>(注5)</sup>。以上のように、「私」を取り巻く生活苦の記述は、戦争遂行のための緊縮財政、國民に強い大増税等と深く連鎖しているのである。

## (二) 強化される戦時動員体制等の戦時特色

第四節に、現役兵として入營する卒業生、新妻との別れを悲しんだ南佐久の寒村の若者の噂話が書き込まれることで、近隣から地方の隅々にまで拡大される戦時動員体制の強化が浮かび上がる。時間が経過した第十二節で、教員仲間の体操教師までが出征することは、戦局が一段と苛烈になっていることを物語っている。もう少し踏み込んで敷衍すると、臨時召集される体操教師は、「私」の心配を打ち消すように、「私などは、へえ召集されたところで、御留守居役の方ですから——」と、力強く握手を返した表現から、第一戦に投入される召集では

ない。兵役制度から言うと、退役して現在四十歳未満のものが対象となる國民兵役として臨時召集されているのである。陸軍が戦地に送り出した兵員は、最終的に全師団が投入される文字通りの総力戦となつたことは周知であるが、壮丁ではない体操教師の召集は、戦時動員体制が一層徹底されなければならない戦闘の烈しさを、銃後の「私」に痛感させる出来事なのである。以上のように、動員体制が強められる戦時下の様相は、「私」が見聞した記述によつて的確に伝えられているのである。

第七節から第十節までは、「私」が暑中休暇を利用して函館在の岳父に出版費用の援助を相談する長旅について、東京・青森・函館へ刻々と移動する旅程が、小説形式面の特徴である短文の連続によつて効果的に表現されている。露艦襲撃の噂のある危険を冒して津軽海峡を突き進む文字通り題名そのものの〈突貫〉行なのである。函館行によつて「私」が「狭い噂好きな地方」(二)から脱出することは、結果として「こゝへ来て、広濶とした海国の人の氣象に触れ」(十)ることが出来たように、閉鎖的地域性という自分を取り巻く否定的状況を批判的

に明視する認識の活性化をもたらすのである。

さて、第八節で上京するや否や「私」が目撃した戦時色への反応が次のように書かれる。

東京へ着いた。カアキイ色の軍服は初めて私の眼

(傍観者以下同様)

に映つた。神田の宿へ来て見ると、戦争の芝居の噂などがされて居る。大陸の方で砲火を交へて居る最中に、それが直に芝居に仕組まれて舞台上上るといふことは、妙に私の旅情をそ、つた。

即座に「私」の眼に飛び込んだ事柄が「カアキイ色の軍服は初めて私の眼に映つた」と書かれていることも、戦時色の目撃体験の一事例である。つまり、陸軍の軍人の制服が、従来の濃紺色から茶色味がかたくすんだ黄緑色に改められたのは、明治三十七年二月十二日のことである。そして、その新しい軍服の着用が開始されたのは、ちょうど「私」の上京中の夏からであった。(注6) 制服に関する規則の変更を正確に反映した「カアキイ色」の陸軍兵士の軍服は、目新しい戦時色として目撃者である「私」の目に強く映ることになったのである。

制服の一件が戦時の状況の客観的な目撃であるとする

と、続いて書かれている「戦争の芝居」への反応は、「私」の戦争への向き合い方を明らかにする重要な事柄である。場の移動が認識の賦活作用をもたらしていると述べたが、大受けを狙った当て込み沢山の戦争芝居の流行にどのように反応したかは注目してよい。(注7) 「妙に私の旅情をそ、つた」という感想は、熾烈な戦争の脚色を取り沙汰する世上の熱気を余所にした傍観者の感慨である。これは、銃後に生きる視点から、戦火の拡大がもたらす多大な影響を注視するスタンスに立っている「私」の感想として見過ごせない。「私」が「旅情」を催された理由は、小諸の片田舎を発つて何事も抜け目なく立ち回る商才に長けた大都会に遠路やってきたという旅程のはるけさを実感したためである。遠路を振り返る個人的感慨の強調は、時局迎合的な戦意高揚と一線を画した戦争への非同調的な対峙の仕方を強く打ち出しているのである。

その他、函館行は、軍事的な要衝であった津軽海峡の緊迫した状況を直接目撃する旅行であったことを確認しておきたい。函館到着直後の「私」は、養育院で童話の読み聞かせを行っている最中に、ウラジオストク艦隊の

艦船が津軽海峡を通過するという大事件に遭遇している。これは、すでに『破戒』完成までの副産物である短篇「津軽海峡」（『新小説』明37・12）にも取りあげられているが、「ウラジオストク艦隊」の津軽海峡を抜け、太平洋岸で汽船・帆船の隻など撃沈、「<sup>（五）</sup>帰還」と記されているように、通商破壊のために出没したロシア艦船によって、北海道近海の人心が恐慌状態に陥れられた軍事行動を記述したものである。帰途に乗船した定期連絡船は敵艦の追尾を辛くも免れた船であったという波乱万丈の函館往復であったのである。

### （三）戦況を見守る銃後の国民

第十二節に「一頃の熱狂に比べると、町もシーンとして来た。」とあるように、戦争勃発当初の極度に昂奮した国民の好戦的な敵愾心は、戦争の熾烈化に伴って、息をこらして戦局の推移を見守るような重苦しい状況へ一変する。この十三節では、緊迫感が最高潮に達した状況を、「突貫」に顕著な音声を多用した強調表現で効果的

に書き表している。つまり、危険を冒して目的に突き進む函館行において題名「突貫」の語義に触れたが、この題名には敵陣へ突撃する兵士の鬨の声を指す両義性があるのは言うまでもない。海を渡った大陸でラッパ手の吹き鳴らす音、銃声、砲弾の炸裂する音等が反響する戦場のイメージに、銃後世界で発生する様々な音声を重層させている。それは「停車場の方で起る物凄い叫び声」(三)、息を弾ませて駆け出してくる号外売りの「鈴の音」(三)、召集される兵士を送る「ザワ／＼ザワ／＼人の通る足音」(五)、入営するものを呼び集める合図の「喇叭の音」(十二)等、(呐喊)の語義と反響しあう銃後社会の緊迫した音響が散りばめられている。戦地の(呐喊)に呼応する様々な音声は、戦時の命がけになった昂奮状態を印象付けることに効果を上げている。その音響効果の集中的な到達点が、第十三節の召集される同僚教師を送別する停車場の場面である。

同僚の出征を案じて緊張感をヒートアップさせた「私」は、別離の音響を次のようにとらえている。

入営する人達を乗せた汽車がやつて来て、停車場の

(傍点標者、以下同様)

前で停つた、窓々の硝子戸を開けて呼びかはす声、別離を告げる声、無事を祈る声、帽子を振る音、旗を振る音、汽車がプラットフォームの側を離れる頃にはすべてそれらのものが一緒に成つて、悲しい壮かな生命掛けの叫び声<sup>10</sup>がそこにあるだけだつた……

声、声、声、音、音の語句をたたみ掛け、最後に「悲しい壮かな命掛けの叫び声」に凝縮させた「突貫」の方法の集中的な到達点である。それら諸々の声と音が究極何に一体化したかと言えば、出征する人間の無事を必死に願う「叫び声」に収斂させられている。この引用部の音声の内実は、安否を気つかう悲壮な思いが中心であり、勇壮な武運長久の檄ではけつしてない。「私」が聞き取つた別離の声は、遠からず戦地において鬨の声を叫んで突進する戦士の運命と一体になって案じる家族の叫びであると言ひ換えてもいい。ここに、「私」が日露戦争に終始銃後の民衆の視点から対峙しようとしていると考える根拠がある。

戦争の長期化に伴つて、予断を許さない緊迫した情勢を固唾をのんで見守つていた銃後の国民の緊張は、次の

第十三節において、降り積もつた雪の小学校で開かれた戦勝祝賀会の提灯行列の紅い火と、熱狂する万歳という「雪に籠つた叫び声」によつて解放される。大雪を衝いて舉行された「戦勝の祝ひ」は、その時期、盛大な祝賀の模様から推測すると、明治三十八年一月一日に旅順の陥落したことを祝う戦勝祝賀会に相当する。<sup>(注9)</sup>それは、たとえば東京市中の熱狂ぶりを詳細に報じている「国民新聞」(明38・1・4)の記事の見出しが「正月と旅順陥落が重なり祝賀に酔う<sup>(注10)</sup>」と快哉を叫んでいるように、待ち焦がれた勝報に歓喜する一大慶事となつたのである。小説の流れを辿りなすと、「悲しい壮かな生命掛けの叫び声」(十二)で頂点に達した緊迫感が、戦局を優勢に転じる決定的な勝利に安堵する万雷の聲で解放される展開なのである。しかし、「私」は祝賀の行列の連呼する「万歳」の聲に唱和することもなく、書齋で完成を急がねばならない仕事に専念するのである。祝賀の轟く万歳の聲に全く雷同していない「私」の姿が強い印象として迫る。同様の反応例は、「俺の作つてやつた拙い歌を皆まで歌つてるやうだね。」と、面映ゆがる発言も



あつて、そつけない非同調的な態度を一段と強める。第十二節の召集された同僚を送別した時の悲壮な叫びのただ中にいた「私」との相違は大きい。内村鑑三等の非戦論ではないが、戦時下の時局迎合的な好戦的戦争意識から冷めた位置に立つのが「私」なのだ。言いかえるならば、小説「突貫」は、日露戦争という未曾有の難局が、「私」を中心にした銃後の国民生活にどのように浸透して行つたかを描こうと努めた点に真骨頂があるのである。

### 本論・その三

#### 「私」の形象の意味するもの

三好行雄は『島崎藤村全集』第五卷（昭56・5 筑摩書房）の「解説」において、「突貫」の冒頭・結末部の点線符号について次のような理解を述べている。「私」という文学者の在り様を検証するために、符号表現の機能について明確にする必要があるもので、以下に引用する。

「突貫」は形式的にも新しい工夫を試みた異色作で、二行の空白をおいた書きだしは（私は今、ある試み

を思ひ立つて居る。……けれども斯のことは未だ誰にも言はずにある。）という現在形ではじまる。冒頭の書かれざる二行は収束部のそれと呼応して、体験を切りとつた過去の時間から完了した過去としての完結性を薄め、いわば消えてゆく記憶のなからあたかも強いフットライトを浴びてよみがえつた時間といったふうな効果を添える。光源は現在にある。ややトリビアルな指摘になるが、この説明には若干の疑問がある。冒頭部と収束部の点線は、前者が二行、後者が三行弱書かれており、正確には同一ではない。その機能が明確なのは収束部の場合である。最終本文「……前へ……前へ」を受けた符号であることよって、果敢に前進する能動的意志と行動の持続を強調し続ける視覚的機能が鮮やかに発揮されている。激しく前に突き進む「突貫」の題名を収斂させるにふさわしい締めくくり方である。そうすると、作品の前後に配された点線符号は、空白として理解するのではなく、「私は今、ある試みを思ひ立つて居る。」と重々しく意志を表明する冒頭への接続を意識した導入的機能表現、収束部の符号は、前進

を続ける未完の結末に関わる機能表現として読み取るべきではなからうか。そう考えると、「強いフットライトを浴びてよみがえった時間といったふうな効果を添える。」という考え方にも再考する余地があるのではないか。その他、三好はいわゆる「新生事件」の渦中にあることを意識した創作動機について、「危機を超える新生の方向を文学的出発期の初心にさぐるうとした」ことに言及しているが、「私」の激しい現状超克の意志と行動は、日露戦争下の緊迫した時代相と深く絡み合いながら書き込まれていることが解明されていない憾みを残す。「私」が目撃する戦時下の生活の種々相は、単なる舞台の書き割りのな背景扱いは出来ないのである。そのほか、三好の説明には、二行分を取った十五箇所の空白の設定について言及がない。作品は全部で十六の短文で構成されていることは既述したとおりである。短い分量の短文が連続的に継起する形式は、行動する「私」の動きと呼応して、刻々と変化させられる場面、動揺する生活の継起を強く印象付けることになっている。また、「私」の中で表現を迫って次々と事象・風景が想起される表現形式と

もなっている。

さて、収束部の点線符号の視覚的機能については説明を終えたので、書き出し表現の前に置かれた点線符号について言及しておきたい。本文を読み進めていく過程で「私」が直面している困難な現状の全貌は明らかになってくる。それは、創作の完成まで持続させねばならない精神的エネルギー、重くのしかかる出版費用等の金銭上の懸案、扶養すべき家族の生活等、内外に山積する課題である。それらが重苦しい澱のように意識の底に蟠って「私」を圧迫しているのだ。そのため著作家の自立に執心している野心家である「私」も、様々な難問を痛感するあまり、簡単に決意の表明が許されない躊躇逡巡を覚えているのである。それらが含意された無言の点線符号を経て、重い重圧感を切り裂いた冒頭の意志の表明に到達するのである。<sup>(注11)</sup>

「私」の形象に一貫する志向性は、閉塞した現状を打破して新たな転身を図ろうとする「動」を基調とする点とある。「山を下りよう」と決断した意志を出発点とし、敵艦の出没が懸念される危険な函館行は、「沈

滞した生活を突き破る」(一六) 新たな著作家への方途を求めて「青い深い海」(一九) を渡りきる行動であった。この「海」の語句は、前進し続ける結末において、氾濫の跡に降り積もった道なき雪道を「際涯の無い白い海」(一七) という比喩表現で呼応させられ、「動」の基調の一貫性を周到に整えている。

第一節の将来への明確な展望を切り開く新たな意欲の誕生は、その賦活された精神によって、「私」に自己の陥っているネガティブな状況を明察することになつていく。そして一気呵成に、著作家のあり方を根本から反省し直し、次のような新しい著作生活の選択に踏み出す覚悟の表明へつながらる。

今日まで私は酷だ都合の好いことを考へて居た。自分の目的は目的として置いて、衣食の道は別にするやうな方針を取つて来た。(中略) しかし私は斯の考への間違つて居ることを悟つた。(中略) 私は今日までの中途半端な生活を根から覆して、遠からず新規なものを始めたいと思ふ。私は他人に依つて衣食する腰掛の人間でなくて、自ら額に汗する労働

者でなければ成らない。

中途半端な生活 他人に依つて衣食する腰掛の人間、新規なもの 自ら額に汗する労働者の図式が明瞭である。創作を糊口的手段から峻別してきた従前の方針が、生活意識から遊離した独りよがりの芸術至上の信念に過ぎなかつたと断じ、芸術を生活に近づけることが真に目的を尊重することであるならば、創作活動と糊口的手段を一体に生きる著作生活者として出発しなおさなければならぬ。困難が予想される転身の覚悟は、ペンで身をたてること、即人間の営なむ厳肅な労働という観念で成り立っている。その自主独立の気概が、男気のある義父に「自分で書いたものを出版するといふのも一種の実業だ」(一十) と快諾させる理由になつたのである。

ところで、自費出版によつて著作者として世に立つていこうという企ては、無謀な冒険に等しい。それを敢えて押し切らせた強い信念が「私は他人に依つて衣食する腰掛の人間でなくて、自ら額に汗する労働者でなければ成らない。」という自己規定であつたことは既に見てきたところである。中途半端な生活 他人に依つて衣食す

る腰掛の人間、新規なものゝ自ら額に汗する労働者の図式を指摘したように、真の進むべき道から逸脱していた他人依存の錯誤に気づき、敢為の精神で事業に邁進する独立独行の決意表明である。「汗」の意味は、そのため必須な一心不乱の努力を燃焼させる意味である。

笹淵友一『小説家島崎藤村』<sup>(注12)</sup>は、「自ら額に汗する労働者でなければ成らない。」という一節を、「突貫」の思想性を証明するキーワードとして重視する。笹淵は、「藤村にとって生活は即ち労働であり、そして労働は内的生命の根柢であるという認識がある。」という示唆に富んだ見解を打ちたてた論文「藤村における「労働と文学」——藤村の労働価値観とその軌跡——」を総論として、その観点からの論述を含む各論ともいべき『破戒』論において、トルストイ、ゲーテ、カーライルに影響された生活者の文学の核心に「労働神聖観」という独自の思想性が認められることを論述している。そして笹淵は、「突貫」も上記のような藤村の労働価値説の展開過程の一系譜として取り扱っている。笹淵の論は、抒情詩時代の作品から、晩年の「嵐」「分配」「夜明け前」等の小説、

その他関連するエッセイまで視野に入れて論究されたものであり、その総論としての趣旨は首肯すべきものであると評価する。しかし、当の「突貫」の表現自体にそのような解釈が当てはまるかどうかは、作品検証によって慎重に確定されなければならない。なぜなら、笹淵の論法は、「突貫」を「労働神聖観」という枠組みに整合するように演繹的に位置づけようとしたところに弱点がある。作品解釈を作者側と融通無碍に往復させる論法は、「突貫」の本文解釈の明証性を確保したことにはならない。たとえば、前掲の著作生活者の確立へ向けた宣言であった「額に汗する労働者」という自己規定は、他人に強いられる労苦ではなく、進んで立ち向かう自立・独立性が強く含意されている。笹淵が「労働神聖観」の思想的背景に取りあげた「汝は額に汗して食物を食え。汝は塵なれば塵に帰るべきなり。」(『創世記』三章一九節)のほか、ゲーテ等の「汗の哲学」という思想的脈絡に関連づける解釈を適用することはできない。その他、笹淵は労働について生命を賦活させる根柢と見る見解から、労働と俸給の関係について、「(骨折の報酬)〈労働の報

酬)〈労働いて得た收穫〉という表現にも、月給、俸給という言葉に伴う恩恵的ニュアンスを排してそれが労働に見合う正当な代償であることを示唆しようとする意識がある。」と説いているが、この分析はそのまま「突貫」には当てはまらないのである。郡・町の補助が得られなくなった私塾の経営困難は、結果として「私達は俸給の高に應じてそれだけ受ける分を少く」(三) することに直結したことがはっきり書かれており、笹淵のいう労働重視の思想性の純度と背理する用例さえある。窮乏生活の苦痛に耐える「突貫」の場合は、労務提供の対価としての「俸給」という意味合いなのである。

「突貫」の「自ら額に汗する労働者でなければ成らない。」という表現の文意を、類似した表現を行なった小説「芽生」(『中央公論』明42・10)と比較することで、さらに明確にしておきたい。「芽生」に次のような類似した一節がある。

夕餐の煙は古い屋根や新しい板屋根から立ち登つた。鍬を肩に掛けた農夫の群は、丁度一日の労働を終つて、私達の側を通り過ぎた。それを眺めて、私

は額に汗する人々の生活を思ひやつた。復た私は長い根気仕事を続ける氣に成つた。

長い仕事に倦んだ「私」の視線に入った農夫は、労働と生きるということの普遍的あり方を体現して登場している。鍬と筆との相違を抜きにして、一日の糧を得る努力が「夕餐」いう賜物を結果するという厳肅な価値付けに覚醒しなおすことによつて、「私」は創作に立ち返える意欲を回復させるのである。労働と人間内面の賦活の因果関係がきちんと叙述されていることは言うまでもあるまい。「芽生」の引用文は、「労働」という制作によつて生活と芸術の一元化を実践していると揚言したエッセイ「額の汗」(『新片町より』明42・9 左久良書房)の趣旨の小説版と言つても過言ではない。これに対して、「突貫」の本文表現は「額の汗」との強い相関関係を示していないのである。

さて、「私」の現状を超克する能動的精神は、日露戦争下の社会との接触においても、異彩を放つ行動となつているのが興味深い。「海上も先づ無事」(十)という安着の表現で始まった函館訪問は、「狭い嗜好きな」小

諸の閉鎖性を相対化する「広潤とした海国の人の気象に触れ」たり、男気のある義父が快く二つ返事で援助にに応じてくれたことで、所期の目的を果たすことができるなど、忘れがたい旅になった。「私」がその恩義に全力を傾けて報いる覚悟を新たにしたのは言うまでもない。そのような初志を貫徹する能動的精神を確実にした「私」が、函館滞在中に身寄りの無い不幸な孤児を慰めるため養育院を訪問したことが次のように書かれている。「末広町には阿爺の家の懇意な陶器屋がある。そのこの旦那に誘はれて養育院を見に行つた。私は貧しい子供を前に置いて、小さなお伽話を一つした」(十)。岳父に出版費用の恩借を願う主たる用向きから逸脱した孤児院での童話の口演は、けつして瑣事であるはずがない。

明治七年、明治政府の太政官達によつて孤児等の窮民救済制度として「恤救規則」が制定されることになるが、<sup>(10)</sup>法整備の趣旨は「済貧恤救ハ人民相互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設クヘキ」ことを前提としたもので、その結果困窮する対象者は国家の庇護を受ける慈惠的な存在としてみなされることになった。そのような法の精神にある施し

を受ける救済の対象者という位置づけは、軍備増強の予算を調達するために大増税を繰り返していた戦時経済下に置かれた社会的弱者に、非寛容なしわ寄せを強いて行くのは必至であろう。いわば権利としての救済を主張できない「恤救規則」下の明治三十七年において、童話の口演という無償の奉仕を買つて出た「私」の心意は、「短い滞在中に養育院を見に行き、子供らに話をしたということは藤村の社会的関心を示すものに外ならない。」<sup>(11)</sup>という視点から説明できるものであろう。国を挙げて戦争一色に統制されていく戦時下の片隅に置き去りにされたのが「養育院」であるとすれば、無辜の子供に「小さなお伽話」を語り聞かせる「私」の思念は、慈惠的な憐憫と画然と区別される時代批判意識を垣間見させるのである。

塾の同僚の中で胸襟を開いて語り合える広岡理学士の人物評が「貧乏してそれで猶自ら棄てずに居る」(十一)こと、つまり、貧は士の常という格言に重なる人材への敬意に発していたことや、「私」が執筆する創作の中に激しく労苦する農民の姿が活写されていることなど、一

連の表現を勘案していくと、「自ら額に汗する労働者でなければ成らない。」という自己規定と根底でつながっている社会批判意識が見出されるのである。

## おわりに

小説「突貫」は、目撃者である「私」が、日露戦争という未曾有の難局に際会した銃後の国民の生活の種々相をつぶさに見聞していく書き方を一貫させたところに特長がある。その意味で、「突貫」は、戦争場面を正攻法で描いた戦記文学ではないが、生活に浸透する銃後の不安・動揺を的確に書き込んだ日露戦時下の文学というこゝとが出来る。「私」の形象に仮託された志向性は、日露戦争を徹底して銃後の民衆の側から捉えるヒューマニズムに徹していると言っても過言ではない。

要するに、「突貫」は、戦時下の緊迫感の進行と並行して、著作家への転身を起死回生の情熱で生きようとす「私」の能動性を打ち出した作品である。このように読むならば、後年の「わづらはしい都会の空気から身を

遁れ、生活を建て直すために地方に行った人が次第に田舎の味を覚え、しまひには草深い田舎の方がよくなり、全くの田舎漢となることを書いた作が外国にあると聞いたが、「突貫」一篇はその境涯を突き破らうとするもの、消息とも言へようか。」(「苗代集」附記(定本版藤村文庫)第六篇「道遠し」上巻 昭13・5) という自作解説との整合性も成り立つのである。

## 注

- 1 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(昭56・10 筑摩書房)
- 2 私の理解は後に示すことにするが、岩見照代「突貫」論―島崎藤村論ノート[1]―(『日本文学』一九八〇・一一)は、冒頭の点線符号について「一点、一点、緩慢なりズムにしたがって克明に沈黙符号をうちつづけていく時、その時にはじめて、いまだ声とはならぬ表現の息、そのかすかな端初の声をさきつけたのである。」と述べている。なお、「突貫」は、章数等のかわりに本文中に十五箇所の二行分の空白部を置いた独特の形式を持ち、しかもその節の多くが短い分量の短文

であることが特徴である。以下、全十六節からの引用箇所については、漢数字で表記する。

3 田山花袋「明治天皇の崩御」(『東京の三十年』大6・

6 博文館)は、国民各階層に沸き起こった悲嘆の激しさと喪失感の大きさを詳細に伝える。

4 井口和起『日露戦争の時代』(一九九八・六 吉川弘文館)の「日露戦争と国民」参照。なお、断るまでもないと思うが、「私」が暮らしている長野県のみが予算の減額修正を行う緊縮財政策に転じたわけではない。『福井県史(通史編5 近現代1)』(一九九四・一 福井県総務部県史編纂課)には以下のような記述が見える。「明治三十七年(一九〇四)三月三日、福井県では臨時県会が招集された。前年十二月すでに、可決成立している三十七年度予算を二八・三パーセントも減額更正して、戦時体制への転換がはかられたのである。増税や公債など膨大な軍費調達を、円滑に行うためには、地方財政の緊縮削減が不可欠であった。」と述べられている。

5 注4の井口和起『日露戦争の時代』。

6 『近代日本総合年表』一九六八・一一 岩波書店)に、

(明治三十七年)「212陸軍軍服、濃紺色よりカーキ色に改める」(夏より着用開始)とある。

7 岡本綺堂『明治劇談 ランプの下にて』(昭10・3

岡倉書房)に、「新派は無論に戦争劇を続々上演した。それに対して、歌舞伎座では福地桜痴居士作の『艦隊誉夜襲』を上演し、明治座では松居松葉君作の『敵国降伏』を上演した。前者はわが艦隊が露国軍艦レトウキーザンを撃沈した事実を脚色したもの、後者は北条時代の蒙古襲来を脚色したもので、いづれも時局を当込みの産物であったが、(中略)その他の小劇場でも競つて戦争劇を上演してゐた。」と回顧されている。

8 注6に同じ。

9 注6に同じ。

10 『明治ニユース事典』第七卷(一九八六・一 明治ニユース事典編纂委員会)による。

11 点線符号の類似例として、冒頭と結末部分に二行分の点線を施した小説「母」(『文章世界』明44・6)がある。冒頭の符号は、出生の秘密を明らかにするかと



うか逡巡する主人公の動揺を揺曳させたものと解釈すると、「突貫」の冒頭と類似していると一言えなくもない。しかし、結末部の符号は、生みの母の急死後、「私」が「悲しい人間の覚醒」に不意打ちされる独立的エピソードを区画として示した符号になっている。「突貫」の結末部の意志と行動の連続性を読者に印象づける機能との相違点は大きい。

12 笹淵友一『小説家島崎藤村』（平2・1 明治書院）

13 庄司洋子・ほか編『福祉社会事典』（平11・5 弘文堂）

14 注12に同じ。

本文の引用は、『藤村全集』（昭41）46 筑摩書房）に拠る。